



じんけん

発行
豊中市人権教育推進委員協議会
機関紙編集部
(豊中市教育委員会事務局社会教育課内)
電話 06-6858-2580



令和4年度(2022年度)人権作品募集入選作品より

巻頭言

駄言辞典って何

副会長 森島 孝司

目的の本を買いにというわけではなく書店内をブラブラ見てまわることがよくあります。

タイトルに惹かれて手に取りそのまま何となく買ってしまい、半年ほど本棚に置き忘れていた本、そのタイトルは「早く絶版になってほしい#駄言辞典」(日経BP発行)を年末の掃除で見つけ、さっそく読んでみました。

「駄言」とは固定観念や思い込みで相手を傷つけてしまったかもしれない「言葉」と定義されています。

この本の内容はそれを一般から募集し、その「言葉」をどう感じたか、何が問題なのか、その背景などを整理解説したものです。

「女なのに・・・」「女だから」というジェンダーに係わるものが、普段の生活の中あらゆる場面で圧倒的に多いとは想像していましたが、今でもこ



んなこと言う人が本当にいるのと思えるあまりにもひどい事例の多さには驚きました。

「女医」のように女性だけ性別をつけることも多くみられます、なぜ“女性”を強調するのでしょうか。私も幾つか使っていました。不快に思う方のいることに改めて気づかされました。

差別をする気も、悪気があったわけでもないですが弁解の余地はありません。

駄言が生まれるのには、歴史的背景や社会構造が大きな要因で、これを学ぶことで駄言を減らせるでしょうが、この「言葉」を相手はどう思うだろう、どう感じるだろうという想像力、共感力も大切なのではないでしょうか。

本書では駄言はなくならないだろう、社会の変化に伴い駄言も変化していくのではと断言しているように思います。変化に敏感でなければなりません。

「男女は違うけれど平等」ではなく、「男女は同じで平等」。駄言に対して常に違和感を持って声をあげましょう。駄言を少しでも減らすために。

令和4年度(2022年度)

「人権教育をすすめる市民の集い」を終えて

多方面からの指導のもと最大限のコロナ感染防止対策のうえ、
皆さまのご協力のおかげで開催することができましたことを心から感謝いたします。

令和5年(2023年度)は
12月12日(火)
開催予定!!

意見発表…テーマ:ともに未来を切り拓く

発表者:六嶋 明宏さん (第八中学校長)
河田 法士さん (東丘小学校長)
吉川 有美子さん (北丘小学校長)

記念講演…テーマ:インターネットと人とのかかわり合い

～突然、僕は殺人犯にされた～

講師:スマイリーキクチさん (タレント)



■ 意見発表要旨

第八中学校区は、平成16年(2004年)に小中一貫教育の研究推進校に、平成27年(2015年)には小中一貫教育のパイロット校に指定されました。「夢をもち 心豊かに ともに未来を切り拓く」という校区共通の学校教育目標を掲げ、小中一貫教育を推進しています。

具体的には、中学校の教師を小学校へ派遣して理科や英語の授業を行う出前授業や小中交流授業、合同のあいさつ運動などを実施しています。このことにより、中学校の教師は小学生のようすを肌で感じることができ、小学生は中学校が身近になることよって進学時の不安を解消することができます。また、授業における聞き方と話し方について発達段階に応じたレベル分けを行い、9年という長い時間をかけてコーディネートしていく体制をとっています。こうした学びに連

続性を持たせた体制づくりは、相互理解や他者理解を推し進め、人権を考える上での基礎の形成に繋がるものだと考えています。

9年間を見通した魅力あるプログラムを実践し小中で情報を共有することにより、一貫した生徒への支援が可能です。異学年交流を充実させるとともに、地域と共に学校づくりを推進していくこともできます。今後の課題として、一貫校を視野に入れた新たな組織づくりの必要性を感じています。これからも子どもたちの日々の成長を見守りながら、努力を重ねて参ります。

八中校区常任委員 長谷川 洋美



■ 記念講演要旨

太田プロダクションに所属し芸能活動に勤しんでいた1999年、事務所のネット掲示板に、過去におこった殺人事件の犯人だというデマの書き込みをされる。それから10年以上にわたって誹謗中傷被害に遭う。ネットやFAXでの誹謗中傷(殺人予告を含む)は、自分を擁護してくれた人や家族など大切な人にまで及び、仕事や実生活にも影響した。警察(生活安全課)に相談するも「誰もあなたが犯人だとは思っていない。気にしすぎ。ネットを見ないほうがいい。」と、真に取り合ってもらえなかった。ノイローゼでは?と通院をすすめられることもあり、辛さを理解してもらえないことが何よりも怖かった。証拠となるものを持って、再度警察(刑事課)に相

談し、名誉棄損・脅迫の罪で複数人が立件された。正体はどこにでも居る“フツウ”の人ばかりだった。親身になってくれた刑事さんに感謝した。芸人仲間にかけてもらった言葉もとても励みになった。「デマを拡散した人たちへの仕返し」とは、「自分が幸せになること、幸せに生きること」だと思っている。

自身の経験をもとに、被害に遭ってしまった際の対処の仕方に加え、被害者より加害者の方が圧倒的多数であることに触れ、情報リテラシーを高めようとお話いただきました。

会計 林 久美子



参加者の声。。。

- ・スマイリーキクチさんの講演をきいて、ネットでのトラブル、スマホ、ネットの使い方など考えるととてもよい機会となりました。自宅に帰ってから子どもと話し合いたいと思います。
- ・スマイリーキクチさんの講演がよかったです。自分にも他人にも優しい気持ちでいたいと思いました。
- ・小中一貫の教育は、子ども達のつながりを強くし、親のつながりも強く、ひいては地域のつながりも強くなることでしょう
- ・この様な会に参加した事がなかったのですが、人権というものを改めて考える良い機会になりました。

豊中市人権協は今日まで「市民の人権感覚の育成と、人権が大切にされた市民社会の実現」をめざし、取り組んでまいりましたが、自主的の市民団体として、今後、自らの財源確保も大事なことと考え、昨年度にひきつづき「人権教育をすすめる市民の集い」においてご参加の皆様へ支援金をお願いいたしましたところ 26,700 円の支援金をお寄せいただきました。皆さまの貴重な支援金は今後の人権協の活動に活用させていただきます。ご協力ありがとうございました。

十三中校区

めぐりて道頓堀・千日前に行く

十三中校区常任委員 荒川 由美子

12月8日、人権協事務局長の西田先生の案内で難波へ現地研修に行きました。

大阪松竹座前に集合し、東へ道頓堀川に沿って歩きながら芝居小屋に生きた人々への偏見や差別、その逆境を吹き飛ばした逞しい生き方などを、雑談やユーモアを交えながら楽しく詳しくお話をして頂きました。



その後は、法善寺横丁から千日前へと移動しました。今は華やかなビルや広い道路になっている場所が、かつては墓所であったり、処刑場であったり、鎮

魂の祈りをささげる場所であったことが紹介されました。

楽しみ・苦しみ・悲しみ、人々の営みの歴史は人権の歴史そのものであると、改めて考える機会となりました。

十四中校区

大阪市立阿倍野防災センター

第十四中学校長 若林 智



今後、発生が危惧される地震をはじめとした大災害に関する防災意識を高めることのできた研修だった。

「地震」発生とともに「火災」、「津波」への対応が必要となり、その対応をあらかじめ考え、備えの準備をしておくことが必要と、理解できていると私たち参加者は思っていた。しかし、こちらの施設で「煙・消火器の特性」、「津波」、「減災」を知るコーナー、「震度7レベルの揺れのコーナー」などがあり、参加者一人ひとりが実際に体験することで、防災への意識を更に高め、準備と備えを充実させないといけないと痛感させられた。また、同時に、私たちの住む地域に何が必要か、何ができるか、何をしなければならぬかを地域が考えていかなければならない。そのなかで、地域とともに過ごす社会的弱者の方々への配慮を含めた災害への備えも大切なポイントであるとも感じた。

第二回推進委員研修講座を受けて

テーマ 「LGBTとジェンダー・セクシュアリティをめぐる人権課題」

講師 仲岡 しゅん さん (うるわ総合法律事務所 弁護士)



トランスジェンダーとは、出生時の性別とは異なる性別を自身が認識して生きる人のことで、性別移行した人の呼び方です。性同一性障害とは医者の診断上の名称です。

当事者の経験として、ふつう(?)の男の子だった頃の小・中学生時代にゲイ?(対象が女性ではない)と気づいたこと、しかしそれを隠して女性を好きなふりをしてきたこと、もやもやしていた大学時代、公民館でトランスジェンダーの仲間づ

くりの会に参加して今につながっていく、などの話をお聞きしました。デリケートな話でありながら、当事者からストレートに話をされることで、わかりやすく伝わってきました。セクシャルマイノリティ(LGBT等性的少数者)だけでなく、障害者も在日外国人も数が少ないから、いないことにされてしまう。多様性を知って感じとることが大切だということを学びました。

副会長 植松 英子

学校と人権協からの学び

豊中市立第七中学校長 田中 彰治

12月8日、人権協校区代表委員のみなさんと、大阪市立阿倍野防災センターに施設見学に行ってきました。市のマイクロバスを予約していただいて、ちょっとした遠足のような感じでした。コロナ禍で、さまざまな活動が延期や縮小されてきた中で、ひさしぶりの体験活動となりました。

阿倍野防災センターは、別名体験型防災学習施設「あべのタスカル」といい、その名の通り、さまざまな災害を疑似体験でき、災害に対処する方策を学習することができます。私たちは「自分の命を守るために自助について学ぶ」をテーマとしたCコース（約1時間）を体験しました。

体験する中で、私の心が締め付けられたのは地震による災害体験でした。阪神淡路大震災の記憶がよみがえってきました。地面からつきあげられるドンという揺れ、そのあとにやってくる横揺れを覚えていました。震度7体験では、手すりを持つ手が汗で

びっしょりとなっていました。東日本大震災では、テレビの前で津波の映像を凝視していた自分を思い出しました。

災害や事故はいつおこるかわかりません。いつ出会うかわかりません。急な事案に対応できないこともあるかもしれません。だからこそ、私たちは過去を振り返り、過去の事象から学び、次の方策を実行していかなければなりません。準備することも大切です。想定外の事案では、客観的に俯瞰し、見立てをすることも大切です。改めて危機管理意識をもって、安全安心な環境を作っていこうと思いました。



役員・常任委員現地研修会

水平社博物館を訪れて

副会長 古川 博夫

「人の世に熱あれ、人間に光あれ」との有名な一文で終わる全国水平社創立大会の宣言が採択されたのは大正11年（1922年）3月3日のことです。

役員・常任委員の水平社博物館、飛鳥方面への研修が1月26日（木）に行われました。

「水平社」の名称を考えた阪本清一郎、水平社旗を考案し、宣言を主に起草した西光万吉、読み上げた駒井喜作の「柏原の三青年」など数々の展示物を見学した後、創立大会に参加し主導的な役割を果たした人々や、その活動を支えた人たちにゆかりのある場所をフィールドワークしました。

平成28年（2016年）に、法律として初めて「同和

ではなく「部落」の文字がはいった部落差別解消法が施行されたのは、水平社が創立されてから実に94年もの歳月を待たなければなりませんでした。



寒波の襲来で粉雪の舞い散る寒い日でしたが、しかしそのような天候でも一世紀、更にそれ以前からの人々の身の凍えるような経験とは比べようありません。

水平社博物館のあと、蘇我馬子の墓と言われている石舞台古墳、極彩色も鮮やかな高松塚古墳、キトラ古墳を見学して、奈良の地を後にしました。

編集後記

ロシアのウクライナへの侵攻が始まって一年が経ち、豊中市では、ウクライナから避難された方へのさまざまな支援を行なっています。豊中市 HP には、そのことに加えて「特定の国籍の個人や団体等を対象とした誹謗中傷や差別、偏見をなくし、それぞれが理解し合い、一人一人の人権を尊重することが大切です」と書かれています。

国籍などにとらわれることなく、一人一人の人権を尊重できる社会であって欲しいと願い、一日も早く平和な日々が戻ることを祈るばかりです。

最後になりましたが、「じんけん」164号発行にあたり、ご執筆・ご投稿いただきました皆さまに、心からお礼申し上げます。

会計 大岩 枝美